

第23回「ことば」フォーラム

外来語とどう付き合うか

2004年 11月 6日 (土)

武庫川女子大学 日下記念マルチメディア館

相澤 正夫 (国立国語研究所)

陣内 正敬 (関西学院大学)

佐竹 秀雄 (武庫川女子大学)

共催：武庫川女子大学言語文化研究所

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（岸本千秋）時間になりましたので、これから第23回「ことば」フォーラム「外来語とどう付き合うか」を始めます。まず皆様のお手元にございます資料の確認をさせていただきます。まず水色の封筒の中に入っている分ですが、1枚目は「外来語とどう付き合うか」のプログラムが入っています。次に今日使います資料で「外来語の言い換え提案」が2枚目になっています。それから少し小さいこの紙ですが、質問票になっています。お話を聞きながら、どんなことでも構いませんので、どうぞ質問をお書きください。休憩時間に集めさせていただきます。薄いピンクのこの紙は、国立国語研究所のアンケートになっています。また帰りに集めますので、どうぞお書きください。それから、国語研究所からのパンフレットが2枚入っています。最後、第1回から第3回までの「外来語の言い換え提案」が冊子となって入っています。それから、武庫川女子大学の研究所からLCクラブへのお誘いということで、1枚、紙をお渡ししています。以上になっていますが、よろしいでしょうか。私は武庫川女子大学言語文化研究所の岸本と申します。今日、司会を務めさせていただきます。それでは初めに、国立国語研究所の^{あいさつ} 蕙澤理事より開会の挨拶を受けます。

蕙澤 皆様、こんにちは。国立国語研究所の蕙澤と申します。このフォーラムの開催にあたり、ひとこと御挨拶を申し上げたいと思います。まず、本日はお忙しいところ多数お集まりいただき、ありがとうございます。心から感謝を申し上げたいと思います。また佐竹先生をはじめ、武庫川女子大学の言語文化研究所の皆様には、この催しの開催にあたり種々御協力をいただき、ありがとうございます。厚く御礼を申し上げます。この「ことば」フォーラムは、国語について国民の意識を高めるとともに、国語研究の最新の成果を広く公表するために行われているもので、今回で23回目を迎えます。今回は外来語の問題をテーマとして取り上げています。近年、日本語の中で外来語の使用が増加し、特に国や地方自治体などの一般向けの文書、あるいは新聞・テレビなど公共性の高いところで多く使われている、そういう問題が指摘されています。こういった状況を踏まえ、私どもの国立国語研究所では約2年前から、官公庁とか、あるいは新聞など、そういった公共性の高い分野について、分かりにくい外来語を分かりやすくするための工夫、それを「外来語言い換え提案」といった形で、事業として始めています。今日ここにおいでの方陣内先生などにも、その御協力をいただいているところです。現在まで3回にわたって言い換え提案を行っています。今日お手元の資料の中に入っていますが、これについては、マスコミをはじめ各方面で大変大きな反響を呼んでいるところです。そういった意味で、本日はこの提案の趣旨・内容等について、研究所の担当者から御説明するとともに、陣内先生あるいは佐竹先生から外来語をめぐる諸課題について、いろいろ御講演いただくことになっています。こういった外来語の問題は、国語研究の上で重要な問題であるばかりでなく、一般の国民の関心も高く、国語政策の上からも大変重

要な問題です。この催しが、皆様方が外来語の問題を考える手助けになれば幸いだと思っています。さて、ここで私どもの国立国語研究所について、ひとことふれておきたいと思います。私どもの国立国語研究所は、現代日本語に関する総合的な研究機関ということで昭和23年に設立され、今年で56年目を迎えます。この間、様々な研究活動を積み重ねてまいりました。その成果をいちいち言うことはできませんが、あとは私どものパンフレットに書いてありますので、ぜひ御覧いただきたいのですが。その中でも特に日本語を読み取り機によって分類した作業、あるいは漢字の使用などについての計量的な研究、こういったものがコンピュータ上で日本語処理の基盤となり、現在の情報化社会の基礎を築いたと、私どもは考えているわけです。そして現在は、今年3月に世界最高水準の話し言葉のデータベースができたわけですが、これをさらに発展させ、今後、話し言葉、書き言葉を通じた大規模な言語データベースの構築に向け、努力しているところです。約3年前ですが、平成13年には、従来、私どもの機関は国の直轄機関だったものが独立行政法人という形に移行しました。それによって、より自主的・自立的な運営が可能になったわけですが、今後さらに日本語についての最先端の研究を進めるとともに、国民の皆様に対するサービスの向上、国民の役に立つ研究所を目指し、努力していきたいと思っています。言葉に対する電話相談といった事業も行っていますので、お気軽にこの研究所を活用していただければと思っています。最後に、この催しにあたり、御尽力いただいた武庫川女子大学の皆様方に改めて感謝を申し上げ、簡単でございますが、私の御挨拶にさせていただきます。ありがとうございます。(拍手)

司会 ありがとうございます。早速、講演に移りたいと思います。まず「外来語の言い換え提案」というタイトルで、国立国語研究所研究開発部門長、「外来語」委員会委員をなさっています相澤正夫さんをお願いいたします。

「外来語の言い換え提案」相澤 正夫 (配布資料 p. 1～6)

相澤 国立国語研究所の相澤正夫と申します。今日は「外来語」委員会の活動を御紹介したいということで、関西のほうに伺いました。「外来語言い換え提案」を2年ぐらい前からやっており、この会場にいらっしゃっている方は特に御関心がおありでしょうから、御存知の方も多いと思われませんが、今日はその趣旨をもう一度御理解いただくことと、言ってしまうと宣伝に参りました。繰り返しになりますが、国語研は「外来語言い換え提案」の仕事を始めて2年ほどになります。言い換え提案が世の中にどのくらい知られているかということで、この仕事を始めてから1年ぐらい経ったときに国民全体を対象とする調査をやりました。ちょうど今から1年ぐらい前のことです。その半年ぐらい前に第1回の言い換え提案が発表されています。そのときに、どれくらいの方が言い換え提案を知っているかということ、私も非常に関心があったのですが、皆さん、どのくらいの率だったか、御想像がつくでしょうか。実は約1割ちょっとでした。正確に申し

ますと、11.4%の方が「知っている」と答えてくださいました。正直に申しまして、私はちょっとガッカリしたのです。たった11.4%かと思ったのですが、先ほど御挨拶を申し上げた蕪澤理事から「国民の10%ということは約1,000万の人が知っていることじゃないか」と言われ、そう思えば決して少ないわけじゃないなと思直して、また鞭打って仕事をやっています。今のが枕ですが、これからしばらく国立国語研究所の「外来語言い換え提案」について、まだ世の中によく知られていない側面なども含め、御紹介したいと思います。お手元の水色の袋の中に、先ほど確認しましたが、まず「外来語の言い換え提案」と上のほうに書いた、私の名前がその右側にあるのが配付資料としてあります。その他に言い換え提案の本体が、第1回、第2回、第3回と3冊入っています。特に第2回の分を使いながら御説明したいと思っています。言い換え提案は今まで3回やってきました。この後、第4回を予定しています。第3回までですが、中間発表を含めて記者発表を全部で6回、2回ずつですから合わせて6回やっています。今日お手元にお配りしたものが最終発表の3冊になります。記者発表をすると、必ず新聞あるいはテレビ・ラジオなどで報道してくれて本当にありがたいのですが、例えば新聞の報道ではどうなっているかといいますと、ちょっと御覧ください。ここに出っていますが、外来語言い換えとあって、どの語がどんなふう言い換えられたかという形で、たいてい一覧表の形で出ているわけです。今日はいろいろな新聞から切り抜いたものを持ってきましたが、だいたいこういう一覧表があって、言い換え語がどうだったか、どういう外来語については言い換え語を断念したかとか、ニュースになるのはだいたいそういうところなので、そういう形で取り上げられることが多いわけです。「目立つ直訳、妙訳なし」と非常に厳しい指摘のものもありますが、こういうものも含め、だいたい単語を別の単語で置き換えることだけに目がいつているように思います。ニュースとして報道するときには、どうしてもこうなるのだろうな、仕方がない面もあるなと思いますが、言い換え提案をやっている我々からしますと、ちょっと足りないなという思いがあります。それで今日は足りないと思っていることについて、ちょっと時間をいただき、御説明したいと思います。先ほどから何回も言っていますが、発表の本体はこういう冊子になっています。このあと、これを冊子と呼ぶことにします。第1回は語数でいくと62語を対象としました。それから第2回は47語です。第3回はこの10月に行いましたが、32語です。全部で141語になっていますが、第1回、第2回、第3回と冊子をさわってみてわかりますように、だんだん薄くなっていつているのです。なんだサボっているんじゃないかと思われるかもしれませんが、そうではないのです。ある意味で我々もだんだん要領が分かってきたといいますか、議論を始め、この仕事に必要ないろいろな作業が、丁寧になってきたと私は思っています。丁寧にやっているため、たくさんやっつけられない、手に負えない。最初に62語もやったのは、今から思えば、かなり無理をしていたなと思います。正直に申しまして、中には拙速だったかなというものも含まれています。ですから

第1回、第2回、第3回と、方法論的には確実に向上しているのではないかと一応自負しています。それでは、これから「外来語の言い換え提案」と書いてある今日の配付資料に添い、お話したいと思います。1ページを御覧ください。大きく二つのテーマについてお話します。一つは、一番上ですが、「外来語」言い換え提案とは、ということで、すでに新聞などをお見せしましたが、言い換えの一覧だけが提案ではない。では提案はどんなものを含んでいるのかということをお話ししたいと思います。それから話の後半では、国立国語研究所ですから、ただ人を集めて議論しているだけではありません、いろいろな調査を行っています。そういう科学的な調査データに基づいて、こういう委員会の議論もしていることを御紹介したいと思います。最後に外来語に限らず、言葉遣いに何が必要かということについて、何が大切かということについてふれて、その後、質疑応答などが予定されていますので、そこでの議論につなげていきたいと思っています。それでは配付資料の2ページ、3ページあたりを使い、まず前半のお話をしたいと思います。国立国語研究所の広報紙「国語研の窓」というのがあり、今日も青い封筒の中にその最新号が入っていますが、そこに私が外来語言い換え関係の記事を書いており、そのうちの第2回のをコピーしてきました。2ページ、3ページは、そういうものです。これは「国語研の窓」の18号、平成16年1月1日発行のもので、最初に書いてありますが、これまでの経緯は、先ほど御挨拶の中で蕪澤理事が申し上げたことと重なっていますので、省略させていただきます。第1回の発表から第2回に移るところで、第1回でかなり基本的な路線が固まったなと思って、言ってしまうと、ちょっと油断したといえますか、第2回の中間発表のときに、提案の趣旨は世の中の皆さんにかなりお分かりいただけたのではないかと感じていました。ところが実際に中間発表をしてみますと、非常にいろいろな反響があり、これはもう一度、世の中に説明し直さなければいけないと思い、第2回の最終発表では、その点はかなり気合いを入れて、もう一度報告を書き直しました。そのポイントを申しますと、今御覧いただいている右側のほう、上から3行目、「重要な点は」と書いてあるところからですが、これと同じ文言が、先ほどの1ページの提案の趣旨にも、ほとんど同じことが書いてありますのでこれを読み上げたいと思います。まず、①公共性の高い場面で外来語をむやみに多用すると、円滑な伝え合いの障害になる、ということです。我々は、公共性の高い場面に基本的に絞っています。裏を返せば、私的な場面については、あまり云々するつもりはないということでもあります。特に公的な場面での情報が共有されないと、日本のような民主国家・民主社会を運営していく上では、みんなが同じ情報を共有できることが条件ですので、それができないと非常にマズイことになる。そういう基本認識に立っています。そういうことになるので②として責任の重いところですが、特に官公庁、報道機関などでは、それぞれの指針に基づいて、言い換えや注釈など、受け手の理解を助ける工夫をする必要がある。それで、③委員会の提案は、そのための基本的な考え方と基礎資料を、具体的に提供す

るものである、ということになります。何度も言っているこの3冊の冊子は、基礎資料として示している、そういうつもりです。ここで冊子の「第2回外来語言い換え提案」をお出しいただきたいのですが、2ページ、3ページをお開けください。そこに、この提案を御利用いただく際の留意事項をまとめています。全部で六つあるわけです。まず一つ目は、語による理解度の違いに配慮してくださいということです。一つひとつの語は、それぞれどれくらい理解されているかが違います。もう世の中に定着しているものもあれば、まだほとんど定着しておらず、日本語に入りつつある、その最初の段階で理解が進んでいないものまで、その間はずっと連続的に定着度が限りなく0%に近いものから、100%に近いものまであります。ですから、その語による理解度の差、違いをしっかりとおさえないといけないということで、これは裏を返せば、ちゃんと調査データを集め、どのくらいの理解度があるのかを知っていなければならないことにもなります。それから二つ目は、世代による理解度の違いに配慮を、ということをあえて書いています。実際に定着度の調査をやってみますと、年齢によって理解度に大きな差が出ます。特に外来語の場合ですと、年齢が高くなると、特に60歳、70歳になると、それ以外より理解度が一段階落ちるという傾向が見られますので、そこに配慮し、若年層ではかなり定着していても、高年層のほうでまだ定着が進んでいないのであれば、その点に関しては配慮しなければならないだろうということをあえて強調しています。それが二つ目です。それから三つ目、言い換え語は外来語の原語に対するものではないことに注意を。第1回のときは、わざわざ言っていなかったのですが、これをあえて第2回でここに入れました。外来語の言い換えをやっていますが、言い換え語や意味説明は、入ってきた外国語、元の原語の意味をとらえてやっているわけじゃないのです。日本語の中に入ってきて、日本語の文脈の中に置かれてどう使われているか。それをとらえて適切な言い換え語なり、あるいは説明なりを加えていますので、例えば英和辞典の訳語とは性質が違うわけです。その辺にちょっと誤解がありました。我々は英和辞典などに見られる訳語を作っているのではなく、日本語の中に入りつつある、広い意味での外来語の意味をとらえて、それを適切に説明するにはどうしたらいいかを考えているわけです。そのことを第2回ではっきり示すことにしました。それから右の3ページにいけますが、4番目として、場面や文脈により言い換えを使い分ける工夫を、ということで、ある一つの言い換え語を出せばそれで済む、とは思っていません。例えば、そこに例として挙がっていますが「トレンド」、第1番目に挙げるのは「傾向」だと思いますが、その他「動向」とか「流行」、そういうふうに置き換えたほうがぴったりする、じっくりくるような文脈ももちろんあるわけです。ですから一つに固定しないで、その他の言い換え語例に挙げたものも御覧いただいて、その文脈に最もふさわしいものを選んでほしいということも訴えています。それから5番目として、専門的な概念を伝える場合は説明を付け加える配慮を、ということを一項目として挙げています。例えば、これは第1回の提案のときに、

ここに例として挙がっていたのですが、分野としては経済でしょうか、金融でしょうか、「キャピタルゲイン」という外来語があったわけです。我々はこれを確か「資産益」と漢語で置き換えたのです。正確ではありますが、キャピタルゲインって何だろうということを知らないと、いくら「資産益」と置き換えても、言葉としては一応置き換えたことにはなりますが、中味が分かったことにはなりません。ですから、こういう専門領域に属するような概念を伝えるときは、その都度、分かりやすい説明を付け加えてほしいこともあえて訴えています。それから6番目、これがちょっと話題になったところだと思いますが、現代社会にとって大切な概念の定着に役立つ工夫を、ということです。具体的に申しますと、「ノーマライゼーション」という外来語の言い換え、これはかなり苦労しました。ほとんど呻吟^{しんぎん}したというようなレベルのものだと思います。実際にどういう形でこれを発表したかと申しますと、同じ冊子の35ページをお開けいただけますでしょうか。言い換え提案はだいたい1ページに収まっているわけですが、これは1ページのギリギリのところまで記述されています。多分、今までで一番長い記述なのではないかと思えます。それくらい手引きのところ、ある意味でこの言葉・概念の重要性と、それを置き換えるときの注意事項を書いておかないと不足であると委員会では考えました。これを具体的に御説明したいと思えます。言い換え語としては「等生化」という言葉を、多分「等生」という言葉は今までなかったわけですから、新たに造語しました。「ノーマライゼーション」ですので、最後のところに、そういうふうにするという意味で「化」という接尾辞をくっつけて、「等生化」という言い換え語を提案したわけです。その前提として、手引きの二つ目の項目に書いてありますが、「共生化」という言い方があったわけですが、共生という言葉の意味が、使われているうちにどんどん広がってしまい、さらにそこにノーマライゼーションの意味まで加えるのはどうかなということもあり、議論をいろいろしたのですが、最終的に「等生化」という言葉を造って提案したわけです。ただ、耳で聞いたときには非常に誤解されやすいのです。漢語の宿命ですが、この場合の「等生」はあまりプラスじゃない「統制」などもイメージされますので、「その点はあまりよろしくない」という意見も委員会の中ではありました。もっとも「共生」という言葉も、よく考えてみると、あまりプラスでない「強制」なども思い浮かぶわけですが、なぜか共生という言葉は世の中になんか受け入れられています。「等生化」だけでは、話し言葉、耳で聞いたときに分かりにくいということで、厳密に言うと言い換え語ではないのですが、言い換え語の欄に「等しく生きる社会の実現」という、かなり説明的な句を入れました。我々としては、これは例外的な処置でした。その他の言い換え語例としては、一応「共生化」と、かなり意味は漠然としますが、趣旨をくんで「福祉環境作り」という言葉もあげてあります。こういったいくつも言葉をあげた場合には、手引きで、それぞれの語の使い勝手について、あるいは留意事項について記述するという形になっています。このように「外来語言い換え提案」は、最初に新聞記事を見ていただいたよ

うに、言い換え語の一覧だけを世の中に出しているのではなく、いろいろな情報を加えたものを基本的にこういう冊子という形で提供しているわけです。それから研究所のホームページ上で、いつでもお使いいただけるように公開しています。ちょっと時間がかかりましたが、後半の話に移りたいと思います。冊子ではなく、また配付資料に戻り、今度は4ページ、5ページあたりを御覧いただきたいと思います。これもコピーで恐縮ですが、「国語研の窓」の20号、平成16年7月1日の発行ですが、そこに私が紹介記事を書いたので持ってきました。これはどういうことかと申しますと、「外来語言い換え提案」を始めたのですが、最初は全くゼロに近い状態でした。国語研究所なので何か準備ができていたのではないかと思われるかもしれませんが、スタート時点では、これに使えるデータは非常に限られていました。国語審議会の資料を作った関係で手がかりになるものはあったのですが、調査不足は否めませんでした。早速、「日本語の現在をとらえる調査研究」という調査を始め、その中で何種類かの必要な調査を行いました。今日は、その中からいくつかを御紹介し、こういう調査に基づいて言い換え提案をしていることを御理解いただけたらと思います。左のページの中ほどに、「なぜ「日本語の現在」なのか」という見出しがあり、一つ段落を飛ばしたあたりですが、①として、「緊急性の高い国語施策上の問題の解決に資するために、日本語の現在の状況を的確に把握する必要がある」とあります。だから、こういう調査研究を始めましたということです。科学的なデータに基づいて議論しないと、やはり説得力に欠けると思います。具体的にどんな調査研究を行ったかということをお申しますと、右のページですが、二つ目の「どんな調査研究を行っているか」、です。大きく分けると2種類になります。一つは、言葉に関する国民の意識、言葉を使っている方々の意識を様々な側面から探るもので、これは「意識調査」と我々が呼んでいるものです。もう一つは、日本語そのものが、例えばいろいろな媒体で、新聞でも白書でも何でもいいのですが、そういうところで、どういうふうに使われているかということをお調べする「実態調査」です。言葉を使っている人に対象とする意識調査と言葉そのものを対象とする実態調査、この2種類を行っています。実態調査はどういうものかと申しますと、5ページを見てください。時間の関係で簡単にグラフについてふれるにとどめますが、例えば毎日新聞には電子化されたデータがありますので、そこに福祉関係のわりと重要な概念、「バリアフリー」と「ユニバーサルデザイン」が過去10年間どのような使われ方をしてきたか、頻度の変化・推移を示したものがあります。「バリアフリー」は2000年あたりが一番山の頂上になっている。それに対して「ユニバーサルデザイン」は徐々に使われ始めてきていることが分かります。こういう実態を踏まえ、それぞれの語の特徴などをとらえながら、委員会の議論をしています。実態調査はそれだけにしておき、意識調査について、ちょっと触れたいと思います。三つばかりやっています。一つは、言い換え提案にどうしても必要な「外来語定着度調査」です。先ほど申しましたが、語による理解度の違いを知らなければいけないということで、一

つひとつ取り上げた外来語について、三つの点を聞いています。一つは、「その外来語を見たり聞いたりしたことがありますか」とまず聞いて、どのくらい接触しているか、接触度を聞きます。さらに見たり聞いたりしたことのある人に対しては、「その外来語の意味が分かりますか」と理解度を聞いています。さらに「分かる」と答えた人には、「その外来語を自分でも使ったことがあるか」と使用度を聞いています。委員会では一応この三つを聞いていますが、提案する際には理解度の数字を根拠にして、個々の外来語の定着度を大きく4段階に分けて整理しています。それから二つ目の意識調査としては「全国調査」をやっています。配布資料の4ページの下の方に帯グラフがあります。これはあっちこっちで使っていますので、すでに御覧になった方もいらっしゃると思いますが、研究所が言い換えで取り上げた外来語と、その言い換え語を比べてもらったわけです。「元の外来語のほうが分かりやすいか、それとも言い換え語のほうが分かりやすいか」と聞いて、提案した後、どういうふうに世の中で受け止められているかということを追跡してみました。一番上に「インフォームドコンセント」、次に「グローバル」、「デイサービス」となっており、この三つの外来語は理解度がそれぞれ違っています。4段階で言うと、インフォームドコンセントは25%未満の理解率です。グローバルは50%未満の理解率。デイサービスは75%をすでに超えています。こういう違いのあるものについて、「言い換え語とどちらが分かりやすいか」と聞いてみますと、「インフォームドコンセント」に対して「納得診療」という言い換え語は、65.5%のほうが「こちらのほうが分かりやすい」と答えてくださいました。それに対して次の「グローバル」は「地球規模」という言葉を提案していますが、これは56.3%、元の外来語と比べると2倍程度、全体の半数以上の人々が「言い換え語のほうが分かりやすい」と言っています。それに対して「デイサービス」のように理解度が75%を超える段階になりますと、これは当然のことだと思いますが、さすがに「言い換え語よりデイサービスのほうが分かりやすい」という人のほうが上回っているという形になっています。すべての元の外来語と言い換え語をこんな形で調査することはできませんが、代表的なものを選んで、こういう追跡調査もやっています。最後になりますが、6ページ目を御覧ください。これはどういうグラフかと申しますと、全国調査をやり、こういうことを聞きました。わりと定着していると思われる「キャンセル」という外来語、「解約」という漢語、「取り消し」という和語、この三つについて、これは類義語の関係になると思いますが、「この中で一番分かりやすいのはどれでしょうか」と聞いてみたわけです。ちょっと乱暴な聞き方かもしれませんが、少しずつ意味が違うじゃないかとか、取り消しが一番広い範囲を持っている言葉じゃないのか、ということは一応ありますが、それは置いておき、こういうふう聞いてみた結果です。これはちょっと面白いと思いました。というのは男性と女性の差を、それだけで見ると差があまりありません。一番上の総数は全体の比率ですが、男性、女性に分けても、ほとんど変わりが出ない。ところが年齢層で見えていきますと、男女差と

いう点では見えませんが、明らかに年齢差は出てきます。これをパッと見て感じたことですが、一番右の「取り消し」は、男性も女性も60歳以上はかなり票を集めているが、それ以外の年齢層では、だいたい全体の3分の1ぐらい人が「取り消しが分かりやすい」というところに落ち着いているのです。若い人でもそうです、あまり変化がありません。ところが残りの部分の「キャンセル」と「解約」の関係を見ますと、どうでしょうか。若いほうにいくにつれてグングンと外来語の「キャンセル」が増えていって、この分だけ「解約」という漢語の部分食われていて私には見えませんでした。このあとどうなっていくのか。このまま「キャンセル」が「解約」を食いつぶしてしまうのだろうか。そうは思えない面もあります。「解約」と「キャンセル」は意味分担がちょっとずつ違ってきますので、若い人が「解約」という言葉をいったん覚えれば、恐らくこの言葉がなくなるとは思いませんが、話し言葉などでは「キャンセル」と言うことがあるんじゃないか。このあとのことが別に心配というんじゃないですが、漢語と外来語の関係ということで、いろいろ考えてしまいます。そろそろ時間ですので、最後のまとめに入ります。最後の「キャンセル」と「解約」の例などからうかがい知ることができるのですが、大雑把に申しまして、外来語がよく分からない、あるいは苦手だという方々が高年層のほうにたくさんいらっしゃいます。その反対に若い人たちは、外来語はある程度不自由なく使いこなせるようですが、逆に今度は漢語に対して苦手意識があるんじゃないか、あるいは分からないんじゃないかと思います。ちょっと刺激的な言い方をしますと、今、世の中には「外来語弱者」と徐々に生まれつつある「漢語弱者」の両方がいて、我々は外来語のほうに目を向けていますが、そこばかり見ているわけにもいかななくて、時代が移っていくと漢語の問題も、これから考えていかなければならないのではないかと考えています。1ページ目の最後の3番目、「外来語だけの問題か 一情報格差を生まないために」とあえて書きました。外来語に限らず、言葉の分かりにくさは、社会生活に必要な情報を共有するうえで大きな障害になります。このあとの質疑応答あるいは議論などで、また触れることがあるかと思いますが、その時々聞き手が誰であるのか、情報の受け手が誰であるのかに配慮することは、時代が変わっても必要なことだろうと思います。ですから、そのための工夫することが何よりも大切ではないかと申し上げ、とりあえず講演をこれで終わらせていただきます。御静聴どうもありがとうございました。（拍手）

司会 ありがとうございました。続きまして「外来語を育てるとは」というタイトルで、関西学院大学教授、同じく「外来語」委員会の委員でいらっしゃいます陣内正敬さんにお話しいただきます。お願いいたします。

「外来語を育てるとは」陣内 正敬 (配布資料 p. 7～8)

陣内 関西学院大学の陣内と申します。どうぞよろしくお願ひします。外来語委員会の一委員でもあります。今日は一委員としての私の外来語に対する考え方を紹介したいと思

います。タイトルが「外来語を育てるとは」で、これは外来語を育てることが前提となったものの言い方をしていますが、現実には私はそのように思っています。外来語を排除することはあり得ないと思っており、育てることが大事で、どういうふうに上手く育てるかという方策を考えるのが現実的だと考えています。だから「外来語をよく育てるとは」と本当は「よく」を入れたかったのですが、真意はそういうところです。言い換えをすることが、外来語をよく育てていく一つの方策であるという前提で話をします。私のレジュメは7ページ、8ページです。7ページの1、はじめに、というところですが、何事も、よく育てるには、あるいは健全に育てるためには、よい土壌と愛情が必要であると、ちょっと洒落てみたわけです。土壌というのは、日本語とか日本社会、そういう一人の人間を超えた広い意味をイメージしています。愛情というのは、一人ひとりがその言葉を使うときに、あるいは言葉と向き合うときに、どういう気持ちでその言葉をとらえているかということです。だから個々一人ひとりの問題ということで、育てるのには植物でも子育てでも同じと思いますが、よい家庭とよい愛情がいるわけです。そのような発想があるんじゃないか、これが全体を流れる考え方だと思ってください。2番目は外来語についての基本的な考え方ですが、ここで三つ出しました。一つは、外来語化自体は止められない流れだということを認識する必要があることです。OHCで出している、「日本列島丸」を御覧ください。日本列島は、ここに固定して動かないのではなく、実は動いているという発想です。歴史を考えますと、明治からは西洋のほうを向っていますが、それ以前はずっと中国から影響を受けています。だから漢語や漢文化の影響を受けています。これは西のほうに航海していると考えられます。一方明治以降は欧米の、米国だけではなく欧米と考えたほうがいいのですが、東のほうへ動いていっている。漢語から外来語に移るのは、こういう流れがあれば当然です。確かに、明治期にはいろいろな翻訳語を造り出し、西洋の言語、特に英語に対しての翻訳を造ったわけですが、日本語には片仮名がありますので、いずれそれは、カタカナ語としてそのまま借用することになってきたと思われまます。この航海はこれからも続いていくでしょう。「歴史的な産物」とそこに書きましたのは、そういうことです。それから「国民性を反映するもの」と書いているものの中味としては、新しい物好きであることと曖昧なことが好まれる、その二つのことが非常に大きいだろうと思っています。外来語は最初に出てくるときは新語であって、わけの分からない音の連続が聞こえてくる、あるいは書いてあるわけです。そういう新しいものに対して、飽くなき探求心といいますか、技術革新などを考えると世界一の技術を持っているわけです。それは必要にして、そういうものをどんどん積み重ねていっているわけですが、これが言葉の面でもあるだろうと思っています。それから「曖昧性」というのは、これはよく言われることです。例えば中国から来ている留学生に質問を受けたことがあります。日本人の学生と話していると外来語がよく出てくるのですが、「それはどういう意味ですか」と聞いても、なかなかはっきり答

えてくれない、というのです。つまり、あまり分からないままに外来語を使っている。「フォーラム」とか「シンポジウム」、何かいろいろありますね、「パネルディスカッション」とかありますが、それもあまり明確な意味は知らずに、だいたいこんなふうな形の討論会ですがという形で説明するわけです。よくそんなもので日本語って話せるものだな、これが正直な感想です。だから我々は文脈から意味を推測するのに非常に長けている。日本語はハイコンテクストの言語といわれますが、意味をとるのに場面に依存する割合が非常に高い言語です。だから、ある意味で日本人はそういう発想が得意である。だからこそ言葉自体をとらえるとあまり分からなくても、全体の文脈から、こんなことなのだと分かってしまう。そういうコミュニケーション姿勢が、外来語をますます広げていく、また我々が多用していく根拠になっているだろうと思います。それから2番目の要因として「外来魚と外来語」ということです。これもちょっと洒落てみたつもりですが。ただ自然の生態系と言葉の生態系は、もちろん質は違いますが、何か根本を流れるものが同じじゃないかという気がしています。和語、漢語、外来語というのを語種と言いますが、やはり種が共存していくことが必要である。今日お配りしたプリントの8ページに、新聞記事の一部をコピーしたものがありません。「琵琶湖の外来魚対策奏功、ブラックバス激減」とあります。皆さん、関西の方だったら非常に興味があると思いますが、琵琶湖でブラックバスとかブルーギルなどの外来魚が増えすぎて、在来魚を食べてしまっている。さっきの相澤さんの話では、外来語が漢語を食べているとあったのですが、まさにそのような状況が、琵琶湖では自然の生態系の中で進行していたわけです。そこで「キャッチアンドリリース」つまり再放流を禁止するという措置が出され、その成果が上がったという記事です。この記事のリードの3行目に、「滋賀県が始めた駆除事業」という言葉があります。駆除というのは、いらぬものだから、なくしてしまうわけです。外来魚はあまりにも増えすぎて生態系を乱したので仕方ないことだと思いますが、外来語をこういう形で駆除するのはよくない。こうならないようにしないといけないという一つの反面教師として、私は記事を見ながら考えていました。日本語には漢語、和語、外来語という三つの語種があるわけですが、このバランスがあまり急激に日本語の体系の中で崩れると、頭の中がパニックになるわけです。つまり頭の中で環境破壊を起こすわけです。そうならないように何か対策を講じないといけないという発想です。その一つの教訓として、このような記事を載せました。それから3番目ですが、「外来語の正体」ということで、外来語は決して英語ではない、日本語であるということです。音も随分変わりますし、中味も変わる、意味も変わるので、英語をしゃべっているというのは大間違いということを確認する必要があるだろうということです。次に3の「問題点と対策」にいきます。ここに二つ、外来語の影響がどういうところにあるかということで、一つは日本の言語文化、広くいえば日本の文化と言っているのですが、外来語によって従来の日本文化が崩壊していくのではないかという議論は非常にたくさんあり

ます。これについては、そこに書いてありますように、横に置いておきます。今日の話はそうじゃなく、もう一つの側面についてです。外来語委員にはいろいろな委員がいますので、考え方も様々ですが、私は正直に申しまして、2番目の言語生活の健全性のために、こういう仕事をしているという立場です。これを平たく言いますと、先ほど紹介がありましたように、日常のコミュニケーションの中で、外来語がコミュニケーション不全を起こしている、だから何とかしないとイケない、そういう問題意識です。心構えということでは、これは先ほどから言っていますように「外来語を排斥するのではなく、よく育てましょう」ということです。じゃあ、やり方をどうするかということ。方策として、最初に言いましたように、もう外来語化の流れを止めることはできない。そうすると、それを緩やかな変化にもっていけば、何とかたくさんの方がその環境に適応しながら生きていけるだろう、そういう発想です。だから「緩やかな増加を実現する」ように努力しましょう、そういう考え方です。そのために外来語をいろいろ分けないとイケない、分類しないとイケないと思います。大きな分類のやり方として、①に書きましたように、「ことばの公共性という機能」と「広告性という機能」、ここを分けて考える必要があります。先ほども、どういう外来語を言い換えているのかという話の中で、公共性の高い外来語を言い換えるという話がありましたが、まさにそれと同じことです。我々は「公共外来語」とか「商業外来語」といつているわけですが、そこで言いたいことは、どれくらい通じないとイケないかという問題と、どれくらい感じてもらうべきものなのかという問題があると思います。「公共性」というのは、みんなが知らないといけないものです。公共性が高いということは、そういうことです。そういう外来語、つまり通じないとイケない外来語については、何らかの方策がいるでしょう。ただし感じてもらえばいいという外来語、広告性の非常に強いもの、それがないと生死にかかわるという問題じゃない、その人の趣味でやっていけばいいというものに関しては、いちいちこちらからどうこうと云々する必要はないと思います。だからそれは、それぞれの人が感じてもらえばいい。その二つが、外来語を分ける大きな一つのポイントではないかと思えます。これは我々の言語生活を考えたときのポイントです。形によっていろいろ分類していくやり方もありますが、コミュニケーションを考えたときには、こちらあたりを一つの目安として外来語を絞り込む必要があるんじゃないかと思えます。それから、もう一つ、②として「ことばの普及度によって、言い換えターゲットを絞る」というのがあります。これは8ページにグラフを書いたものがあると思いますが、その上のほうのグラフ、山型とS字型の累積度数分布曲線と書いてあるものは、時間とともに、あるものが集団の中に普及していく割合を示したもので、決して時間と普及の割合が直線的に1対1で対応していくのではないことが分かります。「S字カーブ」と言いますが、だいたい最初は非常に緩やかで、あるところから急に増えだし、最後はまた緩やかに全体に広がっていく、そういう普及が一般的です。我々外来語委員会で扱う外来語は、ど

こら辺のものなのかということですが、あまりにも知られていない、本当に出てきたばかりの外来語をいろいろいじくっていても意味がない。つまり、このS字カーブの10%から30%あたりにかけて斜線が引いてありますが、ここらあたりを通り越したものは、だいたい黙っていても集団に広がるということです。だから5%以下とか、ここだったら7~8%でしょうか、それ以下ものをいろいろやってみても、それは何も広がらないかもしれないから意味がない。そこは一応捨てて、だいたい10%あたりから広がりつつあるものが、現実には日常生活に影響してくるものだろうという判断で、そういう外来語を中心に言い換え提案をしているわけです。逆に75%以上の理解率があるものについては、これもやらない。ある意味で、もしそれを知らない人がいたら、それは勉強してくださいということにもなると思いますが、自助努力といいますか、そういうものも必要です。これはちょっと厳しい言い方かもしれませんが、しかし私が個人的に調査したものでは、高齢者であっても分からない外来語があったときにどうするか、自分で調べたいという方も結構おられるわけです。そういう姿勢も非常に大事だろうと思います。さて①に戻るかもしれませんが、写真をちょっと、これはある駅の案内板ですが、ここに大きく何と書いてあるかというと、「ペDESTリアンデッキ」と書いてあります。これは建設される前から、そういう工事をやっていますという看板みたいにずっと出ていたわけですが、掲示でも出ています。これは「歩行者用デッキ」ということです。ペDESTリアンというのは、ラテン語系の言葉で非常に難しい単語です。日本人が分かる単語だったらウォークでしょう。ウォーカーデッキ、要するに歩行者デッキのことです。ウォーカーデッキとか、何かそういうふうに言えば、すこしは分かるかもしれない。ペDESTリアンデッキと言われても何のことか分からない。これは何かこういう事業をするときに、歩行者デッキじゃ、なかなかお金が出ないかもしれません。だから歩行者デッキは分かりやすいが、ある意味で魅力がないわけです。見えすぎて魅力がないのです。ペDESTリアンデッキという訳の分からない言葉を使うほうが、訴えるものはある。例えば予算を取るとか、そういうときには必要なものと判断されたので、多分こうなったのだろうと思います。私は、そこまでは、まあいいと思います。しかし完成後には、本当に一般の人の目にふれるわけで、ここでもなおペDESTリアンというのは、ちょっとおかしいんじゃないかという感じがして紹介したのです。それから、もう一つの写真、これは意見がいろいろ分かれるんじゃないかと思います。これもある駅の案内板です。ちょっと分かりにくいですが、ここに「駅ビルインフォメーション」と書いてあります。問題はインフォメーションという外来語です。駅ビルインフォメーションと書いてあるものですが、8ページには同じ駅の違う掲示版が出ています。インフォメーションというのは、皆さん、これをパッと見て、ほとんど違和感なく、だいたい通り過ぎていくわけです。ただなぜこれを「案内」としなかったのだろうという疑問があります。隣には「市観光案内所」とある。なぜ「駅ビル案内所」としなかったのか。これは恐らく分

かりやすいのが多分マイナスなのでしょう。ビルという外来語があるでしょう。その隣にインフォメーションがあって、全体としての雰囲気。皆さんにお配りしている写真を見ますと、全体としてカタカナ語が一部あり、これは非常に目立ちます。何か全体のデザインを考えると、真ん中に外来語があって、ものすごく目立つ形になっています。多分このほうが目立っていいんじゃないかという計算もあったのかもしれませんが。インフォメーションというのは、いろいろなところで、とにかくあります。これはある駅のインフォメーションギャラリーです。それから、もう一つ、これもある駅ですが、インフォメーションがあります。今は英語がだいたい書かれており、英語と外来語の併記が非常に多くなりました。「インフォメーション」が誰のために書かれているのかということをよく考えてみると、これはデザインのためじゃないかという感じがしています。「案内」と書くほうがはるかに分かりやすい。外国人留学生も案内と書いてくれたほうが分かりやすい。インフォメーションとカタカナで書くと、これだけ見ても、なかなか英語の information には結び付いてこないのです。だから、これは通じるより「感じる」のほうが強いんじゃないか。公共空間ですので、この辺はバランスが非常に難しいと思います。分かりやすくないといけませんが、何かデザインとか広告的なものとしても目立ってほしい、そういう非常に難しいものです。インフォメーションに関して、私は昔から未だに謎が解けないのです。ただ増えているようです。最後の話になりますが、③の問題点と対策、どういう心得、気持ちで、これからやっていくべきなのかということです。できるだけ在来語、和語とか漢語、なじんだ外来語を利用する、というのが一つの考え方だと思います。サービスとかセンター、これはなじんだ外来語です。こういうものを「もっと活用」すればいい。あまり新しいものばかりに目移りしないことです。言葉の意味の広がりを目を向けることは、例えば先ほどの話に出てきました「バリアフリー」という言葉ですが、これはもうほとんど定着したといっていっくらい、皆さん、理解率が高いです。ただしバリアが最初に出てきた頃は、多分バリア自体は分かりにくかったと思います。最初は住宅の建築用語としてバリアフリー住宅とか、そんなのが先に出てきていました。そのうち、それが比喩、転用され、心のバリアフリーとか、そういうふうに広く使われ始めた。まさに、ここが問題だと思います。「バリア」という言葉も、これはこのままでいいと思いますが、例えば「壁」をそこで言い換え語として使ったとしますと、「バリア」と「壁」は、今は壁と聞いたら物理的なものしか思い浮かばないと思う。多分それが強いと思いますが、壁を使い続けていると、いずれ「壁のない」となると、それは「心の壁のない」と転用されていくのです。それはそういうものを、ちゃんと我々の頭の中には転用していく本能がありますので、外来語だけじゃなく、在来語のほうにもっと目を向けないといけない。こういう認識も必要です。最後にひとことですが、4の「その他、本当に言い換えは難しく、なかなか出てこない」のがあります。その理由として、分かりにくい外来語を分かりやすくという趣旨ですが、さっきからいっ

ていますように、分かりやすさが、ある魅力をなくしてしまうことにつながるわけです。そこが嫌われるところです。だからグローバルとグローバリゼーションを地球規模と言い換えたわけですが、地球規模と言いますと分かりやすい。だけど音の響きとか、分かりにくいのが夢のあるようなもの、そういうイメージを与えるものとしては、地球規模はちょっと意味が見えすぎる。これは、「カセット効果」(宝石箱効果)と言われるもので、名付けられています。分からない言葉のほうが、何か宝石箱みたいに見えるのです。中に良いものが入っていそう。だ。ついつい、それを使ってしまうということです。だから分かりにくいことは、逆にいえば何かキラキラと輝くものを、そうさせることもあるので、その問題が一つあります。だから、これは通じるべき割合と感じさせるべき割合という問題にまたもどっていくのです。そこを見極めながらやらないといけないと思っています。それから、もう一つは、分かりやすいことが本当に万人に分かりやすいかということが常にあります。「バリアフリー」は、「障壁なし」とか「無障壁」というより「バリアフリー」というほうが分かりやすい人がすでに多いんじゃないかと思います。だから、そこら辺の見極めが一つ大切なところです。一応だいたい時間がきましたので、私の話はこれで終わります。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 ありがとうございます。これで前半のお二人の方のお話が終わりました。今から15分ほど休憩をとります。教室には時計はないのですが、今3時20分ぐらいですので、3時35分から後半を開始いたします。初めにも申しましたように、この休憩の間に、質問票に質問や意見をお書きいただいたものを集めます。無地の名札をつけています係の者にお渡しください。よろしく願いいたします。

<休憩>

司会 お待たせいたしました。それでは後半を始めたいと思います。それでは「暮らしの中の外来語」というタイトルで、武庫川女子大学言語文化研究所所長の佐竹秀雄よりお話しいたします。

「暮らしの中の外来語」 佐竹 秀雄 (配布資料 p. 9～10)

佐竹 こんにちは。佐竹秀雄でございます。私は現代日本語の分析が専門で、特に日常生活の中でどういう言葉が使われているか、それがどういう意味を持つのかという観点で仕事をしています。私のそういう仕事と兼ね合わせ、今日お話しするのは、私たちが生活の中で外来語とどう関わっていくかということを考えようということです。具体的には私どもがやっています一つの調査を紹介します。その調査の結果を踏まえ、外来語を使うことの意味を考えていきたい。そして実際に生活の中で、私たちがどのように外来語と付き合っていけばいいのかということについて、私なりの考えをお話ししたいと思っています。では早速、私のレジュメは9ページと10ページです。最初に私ども武庫川女子大学の言語文化研究所でやっています新聞の調査を御紹介します。新聞において

外来語がどのように使われているかという一つの調査です。私どもでは、ここ5～6年、新聞の1面、経済面、国際面、社会面とか、面ごとの調査をしています。その調査は、朝日、毎日、読売の3紙の大阪本社版ですが、朝刊から毎日五つのセンテンスをとり、それを集めて調査しました。その中にどのような言葉が使われているかという調査をしているのですが、今日は、その中で外来語がどれくらい使われているかの結果を御報告します。まず(1)に表がありますが、それを御覧ください。これは全部の面ではないです、しかも同じ年ではありません。5～6年、年ごとによって違うので、必ずしも正確に比べるわけにはいかないのですが、だいたいのところだと思って御覧ください。まず、スポーツ面です。次の生活面というのは、昔は家庭欄などと呼ばれていたこともあるかと思いますが、最近は生活面とか情報面といった言い方をされていますので、ここでは生活としています。それから経済面、社会面、投書面といいますか投書欄、第1面の六つの面を調べたのです。そこに出ています出現率は、スポーツ面ならスポーツ面で、100語のうち何語くらい外来語が出てきたかというもので、そこは6.9%で、カッコ内に11%とありますが、例えばブッシュとかニューヨーク、そういう固有名詞を含みますと11%、そういう数値です。種類とありますのは、そこに使われた外来語が、種類として何種類の言葉が出てきたかということです。ちょっと見てみますと、一番多いのはスポーツ面で、1面が一番少ないです。スポーツ面は993で、種類つまりバラエティに富んでいるという点では生活面のほうが多い。スポーツ面では同じような言葉が、例えばホームラン、サッカーだとシュートなど、そういう言葉が何度も出てくるので種類は少ない。言葉のバラエティという点では生活面のほうが多いことが分かります。さて、どうでしょう。皆さんは、この数字を見ただけでピンとこないかもしれませんが、今から約50年前に、新聞ではないのですが、国語研究所が雑誌を調査しました。雑誌90誌といって、その当時は読まれている雑誌のかなりのを調査した。非常に大規模な調査をしたのですが、そのときの結果を御紹介しますと、ここでいう出現率にあたるのが2.9%、約3%になっていました。どうでしょうか。50年経って、多分、私たちのイメージとしては外来語は増えていますね。50年前は、雑誌ですから少し違うかもしれませんが、3%くらいだった。今回の調査の新聞では1面だと、それより少ないか同じくらいでしょうか。スポーツ面は6.9%、もっと増えているような認識があるかもしれませんが、実際にはそんなにびっくりするほど、新聞に関していうと、そんなにメチャクチャ増えているわけではないという気がします。ただ、もう一つ気になりますのは、1面の2.3%に対してスポーツが6.9%で3倍です。生活面ですと4.8%で、1面の2倍です。だから面によって随分違うというのは間違いない事実で、これを少し覚えておいてください。次に二つ目の(2)の表を御覧ください。これは今と同じ六つの面について、各面ごとによく出てきた言葉、多いものからベスト10と言いたいのですが、ベスト15を並べました。そこでクイズです。(a)(b)(c)と三つの面は名前を伏せてあります。残るのは社会面と一面と投書面

(投書欄)です。さて、この(a)(b)(c)は何でしょうか。中身を見ていただくと分かってくるかと思えます。まず(a)を見ましょう。(a)の面で一番多かったのがリーグ、次にチーム、プロ、もうお分かりですね。スポーツ面です。それから、ここにゴチャゴチャいろいろな模様がついているのですが、アンダーライン、リーグやプロに下線が引いてありますが、これは他の面ではあまり出なかったが、その面でたくさん出た言葉です。星のマーク★とか三角▽がついていますが、これはあちらこちらに出てくる。例えば次の(b)の一番上のサービスは(c)の三つ目にもありますし、投書欄の真ん中あたりにもありますし、一面の一番下にもあります。こういうのは、あっちこっちに出てくる言葉です。それから網かけといいますか、ちょっと黒くなっているのは、キロとかドルとかセンチとかメートルで単位です。そういうものを示しています。その面でもよく出てくる言葉、つまりアンダーラインを引いた言葉を見ていただくと、さっきのリーグ、プロ、サッカー、オリンピックとか、そういうものを見ると、いかにもスポーツ面だとすぐお分かりいただけると思えます。じゃあ(b)はどうでしょうか。サービス、インターネット、グループ、この辺ではもう一つよく分かりません。下線を引いたネット、デジタル、ベンチャー、ビジネス、こうくるともうお分かりですね。これは経済面だろうとお分かりいただけます。じゃあ(c)は残る一つなので、生活面だとすぐ分かる、すぐといいましたが、よく見てください。(c)の欄だけ見て、これは何の面だと分かるでしょうか。センター、センチ、サービス、ホーム、ボランティア、グループ、ケア。多分、分からないと思えます。かなり難しいだろうと思えます。これは生活ですが、さっき上の(1)の表で言いましたように、生活は言葉のバラエティの一番多いところでもあるのです。(c)が特別なのか、あるいは(a)(b)が違うのか。社会、1面、投書に関してもアンダーラインは少ないです。ということは、どれがどれですかと右側を四つ隠すともっと難しくなるのです。たまたま私はわざと左側の三つを(a)(b)(c)で空白にしたので、皆さんにすぐ分かっていたいただけたと思えますが、右のほうだと難しいだろうと思えます。つまり生活面とか社会面、1面、投書は、それほど特別に特徴のある言葉がよく使われているものでもない。逆にいうと、スポーツ面や経済面はちょっと特殊だということが分かるかと思えます。以上のことから、下に少しまとめたのですが、まず、面による違いがある。それから語によっても、よく出てくる語やら、よく出てこない語、つまり、さっき言いましたように私の表ではいろいろなマークをつけている言葉もあれば、アンダーラインを引いて、その面によく出てくるタイプの語もあるのです。ですから、外来語と一口に、「外来語ってどんなの、と言われても、簡単にはいかない」だろう。いろいろな外来語がある。これはまず認識というか確認しておくべきことだろうと思えます。それから二つ目、先ほど言いましたように、こうやって比べるとスポーツ面は異質です。経済面もほかとは少し傾向が違います。経済、スポーツと他の一面、社会面、投書欄、生活面と比べると、そこに感じるのは専門性といえます

か、特殊な世界といいますか、独特の世界があると考えられると思います。そういう意味では外来語が出てくるのは、そういう専門性と関わる。これも当たり前といえば当たり前のことですが、こういう調査からもちゃんと出てきているのです。それから三つ目、今日はこのことを申し上げたかったのですが、生活面と投書面を比べたのです。(1)の表でいいますと、生活は上から2番目、投書は下から2番目で、2.4対4.8です。種類を見ていただきますと、生活面は1,299でバラエティが一番多いわけです。それに対して投書欄は745でバラエティが一番少ない。非常に対照的です。生活面と投書欄を考えてみます。生活面はどういう面かといいますが、かつての家庭面で、実際に、見ていただくと分かりますが、いろいろな情報が載っているのです。生活に関する情報がいっぱい載っているところ。私たちはそこを読んで情報を仕入れています。一方、投書は何かというと、投書するわけですから、私たち新聞の読者あるいは一般人からすると、発信する側です。生活面から情報を得て、投書面では情報を発信している。非常に対照的なところとも言えると思います。そこで情報を得ている生活面では外来語のバラエティに富んでいて、かなり多いのに対して、私たち一般庶民が情報を発信している投書欄ではそんなに外来語を使わず、バラエティも少ないと考えられます。私は一応一般人のつもりですが、私たちは非常に健全ではないか。生活面でワッと洪水のように外来語が押し寄せてくるのに対して、私たちはその中の何でもかんでも使うんじゃなく、冷静にそれほど変なものを使わずにやっているといえるのではないかと感じたわけです。だから、外来語の問題はいったい何なのかということの少し気になるデータだと思います。では次のページ、最後の10ページ目を御覧ください。2の「外来語が使われる理由」に関しては、よく言われていることですが、少し確認しましょう。まず一番よく言われますのは、それまで日本になかったものが入ってくる。それは具体的なものもありましょうし、抽象的なものもあります。昔のことでいえば、例えばガラスとかラジオという具体的に、日本になかったものが入ってきたら、当然、物と一緒に言葉が入ってきます。でも具体的なものだけでなく抽象的な、最近ですと、ネットワークという言葉は抽象的な概念として入ってきました。それから今日、話題になっていたノーマライゼーションなどというのも新しい抽象的な概念で入ってきたものです。それから二つ目にイメージの新しさを感じさせるため、外来語が好んで使われることがよくあります。これもすでにないわけじゃない、ちゃんと「職業婦人」という言葉があったにもかかわらず、それを「キャリアウーマン」に言い換えるといいますが、新しく言い直すような場合です。それから例えば最近ですと、「園芸」と「ガーデニング」、「趣味は何ですか」「園芸です」と言うと、何となく年寄り臭くていやらしい(笑)。でも「趣味はガーデニングです」と言うと、何かおしゃれな感じがする。多分やっていることは同じだと思います(笑)。「増改築」と「リフォーム」にしても、増改築は家の後ろに何か小汚いものを付け足す(笑)、リフォームは根本的にビックリするような、涙を流して喜ぶような改築はリフォームである(笑)。

そういう印象を与える。新しいとか、ちょっとオシャレとか高級である、そういうイメージ戦略には外来語は好んで使われます。それとイメージ戦略という点では、^{えん}婉曲的にあからさまにいうのを避けるような場合にも使われることがあります。例えば^{かわや}厠とか便所、それが今はトイレという言い方のほうが普通でしょう。性行為なんていうとドキッとしますが、セックスというとなんかちょっと軽やかになって、最近ではセックスもいやらしいので今度はエッチとか、だんだん軽くなっていく。そういうときに外来語は便利なようです。それから四つ目に先ほど言いました専門分野の問題ですが、これが専門分野にとどまらずに一般化してくることがあります。アレルギーとかストレス、アレルギーは医学的な言葉だったのでしょうが、核アレルギーとか女性アレルギーという言葉が生まれてきたわけです。そういう意味では何か意味があると思います。今、四つあげたのですが、1番目の中の具体的なラジオとかガラスはいいのですが、さっきのネットワークとかノーマライゼーションのような抽象的なもの、それから4番目の専門用語はどっちかという、先ほどの陣内先生のでいくと「公共外来語」に当たると、世界とつながっているのではないかと。それに対して2番目は、「商業外来語」の世界で活躍しているものだろうと思います。さっき「ペDESTリアン」、メモしたのですが(笑)、よく分からないですが、ここでいうと、これなどは公共であり、かつイメージ戦略でという、何かあくどい例の代表みたいなわけです(笑)。だから五つ目に、官僚が造語するという場合をつけないといけないのかな(笑)、そういう場合もあると思います。3の「外来語使用はなぜ問題なのか」については、これもよく言われていますので、上の三つは読み上げておきましょうか。「(1) 外来語使用に世代間の差が認められるので、世代間のコミュニケーションの妨げになる。」これは今日、何度も出ていました。それから「(2) 外来語を使うことは日本語の軽視につながり、日本語の伝統を崩すことになる。」こういう御意見もあるようです。それから「(3) 原語から外れた外来語使用や和製英語の濫用は、日本人の外国語学習の障害となる。」こういうことがよく言われているわけです。こういわれているので、今日、私がもう少し付け加えたのは四つ目です。外来語を使った名づけといいますか、これはイメージです。先ほどのどうも商業外来語的な使い方、イメージだけのために使うことがあって、そうすると実質とずれてくる場合が少なくないと思います。イメージのために使いますから、最近ですと、何とかプランナーとか、ファイナンシャルプランナーですか、パイナップルプランナーみたいなものですが(笑)、それから何とかクリエイターとか、何とかアーティストとか、何か訳の分からない職業名が流行しているわけです。よく分からない、でも何となくかっこよく見える場合です。これは実質とずれてしまいますから、名前がよいからと思って、その仕事を始めると、実態は違って全然よくないなんていうことは当然あり得ましょう。それから、お互いの認識がずれていくことも決して少なくないと思います。例えば、さっきのセクハラ、セクシュアルハラスメントは非常に重大な問題です。重大な問題のはずですが、それを

セクハラという、何か非常に軽い感じになってしまうことも決して少なくないと思います。「ちょっとセクハラよ」とか、そうすると本当に大事なセクシュアルハラスメントまでが軽く扱われてしまうような恐れもないわけじゃない。そういった問題もいろいろ含んでいるだろうと思います。ここまでが一般論といいますか、前提です。便利だし、よく使われる、好んで使われる外来語であり、でも問題点もいろいろ含んでいる外来語です。じゃあ、そういう外来語をどうするのか。つまり今日のテーマの「どう付き合っていくか」、どのように付き合っていくかということですが、国立国語研究所からは「言い換え提案」がなされています。言い換えについて、私は外来語委員会のメンバーじゃありませんから、外の人間ですから、今日は言いたいことを言おうと手ぐすね引いて待っていたわけです(笑)。外来語は段階があると思います。決して私たち、一般人からすると、外来語は私たちが突然ある日使い出すことはないです。そんなことはまずあり得ない。どこかから入ってくるわけです。「どこかからというのはどこだ」と言われると、さっきいった専門語の世界とか、専門的な世界、その次に、今日も何人か来てくださっていますが、マスメディアの方によって、さっきの生活情報のようにして私たちにワッと入ってくる。そういう状況が現実にあるだろう。そこから外来語がだんだん一般化して普及していくのです。だから、もしその中にさっきの悪い外来語、そういうものがあるとしたら、それを食い止めるにはどうするか。一つは、やはり最初の段階で芽を摘み取るのです。さっきの陣内さんのグラフがあって、なるほどと思ったのですが、あの辺にいつちやうと僕はだめじゃないかなという気もするのです。本当はもっと早い段階でと思うが、早い段階はそれを言い換える言葉もないから、これは非常に難しいだろうと思います。もうすでに広まってしまうと、言い換えることが、なかなか上手くやってもらえないような気がします。だから、それをどうやって言い換えてもらうかというのが今後の課題になってくるだろうと思います。今のは「公共的な外来語」の世界ではということですが、もう一つ、私たちにもっとかかわりがあるのは、「商業外来語」に近い世界の一般のイメージで使うような場合です。さっきの「園芸」より「ガーデニング」がいいという、どこかにそういう発想があるわけですが、それでいいの。そういうチェックがないんじゃないか。そういうものに対して考えるときには、外来語を使うことに対する認識とか意識を、もう一度考え直す。あるいは、そういう意識改革といいますか、外来語を使うにあたっての意識を、もう一度考え直すことが大事ではないかと思っただけです。結局、じゃあ、どうすればいいのという最後のことですが、詳しく説明もなかなかできないので、私なりにまとめました。一つは、今までも皆さんがおっしゃっていますが、大事なのは「言葉を使うのはコミュニケーションのため」ということです。そういうことを考えたら、外来語は特別なものだと考えなくていいだろうというのが私の立場です。個々の言葉が、たまたま外来語なのです。だから言葉をというか、私たちは外来語を使うか、使わないかばかり考えてしゃべっているわけじゃないです。何かを

表現しようとするわけです。相手に何かを伝えようとするわけです。そのときに、たまたまその外来語はよかったら使うわけです。恐らくすでに定着している、さっきのサービスとかセンターでしたか、そういうものが定着しているから、私たちが使って何ら問題がないし、それでよく分かるわけです。でもインフォメーションはよく分からない。その識別をするべきだろう。さっきのように外来語だって、いろいろなのです。外来語だからいけないというわけじゃなく、その表現、コミュニケーションするときその言葉でいいかどうかということを考えればいいわけです。そのときに例えば在来の和語や漢語を見直そうというのも、もちろんあっていいわけです。だから、どうやったらうまく通じるかという原点に立てばいいわけです。ただそのときに、私たちは外来語が何かいい、よく分からないけどいいんじゃないかというイメージを持っている、あるいはイメージに犯されている可能性があります。ちょっと”ビョーキ“的なところがある。そういうものを何とか、もう少しはつきり認識することが大事です。外見と中身は違うわけです。いくら外見が、外来語はよく見えても、決してそれがいいかどうか分からないです。言葉は悪いかもしれませんが、コミュニケーションのためには良い外来語と悪い外来語があると思います。外見にだまされるのじゃなく、ちゃんと識別する能力を持つ必要がある。識別できる能力と、識別しようとする意識とか態度を持つ。それが外来語と付き合うのに絶対必要だろうと考えます。一般の私たちとしては、できるだけそういう外来語の見た目・形にだまされないように、本質をつかむような言語トレーニングといますか、言語センスといますか、そういうものを磨く必要があるでしょう。今日一つ書いたのは、そういう言葉にかかわっている研究者なり研究機関、そういう人たちはそのことをもっと強く訴え、働きかけ、そして指導するとか教育することが必要になってくるのではないか。例えば、まさに国語研究所、うちは小さくてちょっと悲しい研究所ですが(笑)、国立国語研究所のような機関が音頭をとって、もっと日本語の言語センスなり外来語に関しても、「こういうふうにしなさい」とやるべきだと思います。例えば今日のような会はその一つであって、そのお手伝いをできたことを私たちは非常にうれしく思っているわけです。でも私もそのはしくれなので、皆さんに分かっていただけるように考えていくべきだろうと考えます。とにかく、何より、まず外来語と付き合うというより、「日本語のコミュニケーションをいかにうまくするか」という視点をもっと大事にする態度を私たちは養って、その上で外来語と付き合っていくべきだろうと考えています。以上で私の話を終わります。ありがとうございました。(拍手)

【 質疑応答・閉会あいさつ 】

司会 ありがとうございました。次に質疑応答に入ります。設営をいたしますので、少しバタバタしますが、1～2分お待ちくださいませ。ここで司会をバトンタッチいたしまして、国立国語研究所情報資料部の山田貞雄さんをお願いいたします。

山田 どうぞよろしく申し上げます。今、場面が変わっている間に少し申し上げます。私は、国語研究所に電話で質問をいただいて、それを答える役をしています。この外来語言い換え提案についての御意見や質問も、電話では私が担当しています。例えば、これは少し息抜きに申しますと、年輩の方で「外来語をおれはよく分からないから聞きたいんだけどね」と言って、先ほどの外来語委員会の新聞発表のあった翌日あたりになると、刺激を受けられて、「この頃スイカップという言葉があるんだけど、それはどういう意味かね」と聞かれるのです。真面目な問題ですが、スイカップという和製の不思議な言葉も真面目に答える必要があったりします。もっと詳しい話で、「モラル」という言葉があり「倫理」と訳すことも多いですが、それを年輩の方で「モラールとフランス語風に発音していた言葉と、英語で言っているモラルを私たちは区別していたはずなのに、この頃、全部モラルになっちゃって、風紀とか兵隊さんの志気、そういうものをモラールと特別に使い分けていたのに、そういう文化もなくなっちゃったじゃないか」というお話を伺ったりすることもあります。今日の三つのお話に関連していただいた質問は、なるべく紹介しようと思います。30あまりいただき、今、佐竹先生のお話を伺いながら整理しました。まず、御意見と、外来語にかかわらなかった質問については、申し訳ないですが今日は省略させていただきます。そして御意見については、外来語委員会への質問と同じように、記録をとって役立たせていただきたいと思っています。それから日本語についての御質問は、申し訳ないですが、私どもに電話をいただきますと、こちらからお返事いたしますので、別途、質問の担当に御質問いただきたいと思っています。では早速、今日の御質問に入りたいと思います。ちょっと座らせていただきます。まず最初の質問ですが、相澤さんにです。「最終発表という言葉がいろんなところで使われているけれども、その意味はどういうことか。今後はどうなるのか」という質問です。

相澤 はい。相手に対する配慮が足りなかった表現だと私は思っています。全部で4回に分けて外来語言い換え提案をやっており、第3回まで終わったということです。最終発表と申しましたのは、それぞれの会ごとに、まず中間発表をやって、その後やるものを本発表といえよよかったのですがそれを最終発表と我々は呼んでいたものですかから誤解が生まれました。これから最終発表という言い方は、なるべく避けるようにしたいと思っています。本発表といったらいいかなと思っています。

山田 それから「E電というのが前にありましたけれども、そういう言葉はどうなっちゃったか」という御質問もありますが、同じように「地上デジタル放送」とか「デイサービス」、デイサービスについては意見をいただいた方もいらっしゃいますが、「こういう新しく導入されるものは、いつ、誰が、どのように決めているのか。例えば放送機関を連携に取り組んで、国語研究所が何か指導的にやっていくことはどうなのか」というような御質問です。相澤さんに、最初をお願いします。

相澤 まず放送機関の方を取り込んでくれということですが、例えば第3回の最終のペー

ジを見ていただきますと、外来語委員会の中にNHK放送文化研究所の用語研究班の方が入っています。委員会の中で議論するとき、放送用語の観点、話し言葉の観点から御意見をいろいろいただいています。しかし調整する段階で、もともと白書や広報紙など、書き言葉の点検から始まっているものですから、そういうところにうまくはまるような、文体の面でもはまるような言葉選びのほうに傾きがちであるのが現状です。しかし議論の途中では、話し言葉に対する配慮は必ず出てきます。それから最初の「どこで、いつ、誰が、どのように決めるのか」については、少なくとも国語研究所はそういう立場ではないので、よく存じません。どなたか御存知の方いらっしゃいますか。すみません。どこで決めているか、多分それぞれの省庁で、例えば何か規則を作るときなどに決めているのではないかと想像します。

山田 それから「等生化というような造語が必要になった例が他にもありますか」という質問です。

相澤 造語というのを、先ほど私は今まで全然なかったような、例えば二次漢語の形にまとめることについて造語といいました。それをもう少しゆるくとらえますと、「納得診療」という納得と診療を結び付けた言い換え語の提案をすでに「インフォームドコンセント」に対してやったものです。これも広い意味では造語に入るかと思いますが、「等生化」のような造語は実は他にはございません。

山田 それから少しこれは理解度の調査についてのことですが、「外来語の理解度を尋ねるアンケート調査で、正しい意味を書くとか、例文を作るなどといった方法で理解度を計っているのかどうか」。あるいは、もう一つは「提案の趣旨は次第に理解されて、徐々に効果が表れてきているというふうには何かの調査でいっているけれど、それはどういうことか」という質問です。

相澤 まず最初のほうですが、先ほどの講演の中でふれましたが、質問は、まず「見たり聞いたりしたことがありますか」と聞いて、その次に「その言葉の意味はわかりますか」と聞いているだけです。ですから本当に分かっているかどうか、つまり裏をとってはいません。自己申告です。そういう点はまだ詰め切れていないところがありますが、実際ちょっと急いでやっているものですから、確かにそういう疑問がわくのはよく分かります。

山田 もう一つの、「提案の趣旨がだいたい理解されて、効果が表れてきている」という記述についてのことですが、実際、相澤とともにいろいろな作業や調査をしている田中牧郎主任研究員が今日は来ていますので、答えてもらおうと思います。どうぞ。

田中 御質問ありがとうございます。今の御質問は、今日お配りした「国語研の窓」の最新号に第3回の提案の紹介を書きましたので、私からお答えしたいと思います。「提案の趣旨が理解されている」と感じているのは、インターネットで外来語委員会提案のページを見ていただきますと、そこに意見を書き込むページがあります。そこにたくさん

意見が出されますが、初めのうちは非常に誤解の多い意見がきていたのです。例えば無理やり言い換えなければいけないのか、とかいう意見がきていましたが、最近はそのような誤解がなくなり、理解した上での様々な御意見がくるようになったことから、趣旨が次第に広まっているなど感じています。それから「効果が上がっていること」に関しては、この委員会提案の一番の対象にしていた国の省庁の分かりにくい外来語について、様々な省庁の白書を見ますと、今年度版は外来語についていろいろ説明をつけています。あるいは言い換えをしています。そういう例がかなり増えてきています。そういったことから効果は表れてきていると感じています。

山田 では、その次の質問ですが、「外来語への理解度が上がるのは、社会情勢や世相とも関係があるのでしょうか。」という御質問です。

相澤 はい。今まさに新潟で地震があり、新聞紙面に「ライフライン」という言葉が踊っているというか、「ライフライン」という言葉がよく目につきます。我々も言い換え提案で「生活線」という言葉を出したのですが、カッコの中に生活線という言葉を入れた新聞報道などは、しばらく前まではよく見たのですが、今回の新潟の地震関係では、「ライフライン」が裸でどんどん出ているように思います。「ライフ」も「ライン」も分けますと、常に定着している外来語ですので、恐らくこれは一気に定着していくんじゃないかと、とっさに思いました。あまり望ましくない社会情勢ですが、こういうことがきっかけで一気に外来語が普及することはあるだろうと思います。

山田 似たような御質問ですが、「言い換え提案を発表した後、新聞に使用される外来語に変化があったと感じられますか。」という、今のようなことだと思いますが、佐竹先生は新聞のことで何かおありになりますか。

佐竹 外来語委員をなさっていると、誤解されていることが分からないのではないかと思います。「言い換え案を使え」と言っているわけじゃないことが理解されていない。一般の読者は、今まで新聞の表だけ見ていると、いかにも言い換えろと言われたような気がする、そういうお気持ちで、今日聞きに来られた方もいらっしゃると思います。今日御説明いただいて、そうじゃないということが分かったら一番いいと思いますが。ところが、新聞そのものがなかなか使わない、新聞社の方もいらっしゃるそうですが、見ていても、まだ使っていないというほうが正直な感想ですね。一生懸命言っている割にはそれほど、一般の感覚からすると、そういうイメージしか見えません。すいません。

陣内 グラフにもありましたが、「納得診療」はかなり成功している例で、どっちがカッコに入っていたか忘れましたが、あれは新聞でも取り上げられていたような気がします。ただ、かなり選別していると思います。すべてダメじゃなく、良い効果をもたらしたのものもある。

相澤 「言い換え提案」の内容そのものがとられているということでは必ずしもないのですが、新聞によっては新しい外来語とか難しい言葉について、記事の欄外に解説欄を新

たに設けたりして、読者への配慮をしているように思います。そういう欄ができたのは最近のことであって、無関係ではないだろうと思っていますし、そういうふうに思いたいです。

山田 関連の質問では、「外来語の委員会は、漢語、これは熟語ということだと思いますが、漢語が中心だけれども、和語、大和言葉に置き換える、あるいは少し補足すれば、「の」や「な」、「についての」なんていうのを挟んだ一言の熟語じゃなくて、句ではどうなのか。」ということを多分考えている方がいらっしゃるのじゃないかと思います。その辺はいかがでしょう。

相澤 私ばかりで申し訳ありませんが、例えば、こういうことが委員会の中でありました。言い換えには結果として漢語が圧倒的に多いのですが、議論の過程では和語もまな板の上ののっかっています。ごく初期の頃ですが、「インセンティブ」という言葉を最終的には「意欲刺激」という漢語になってしまいましたというか、なりましたが、どれくらい言い換え語の幅が許容範囲になるのかということを探るような気持ちで、実は私は「馬ニンジン」という言葉を提案してみたのです。馬の鼻先にニンジンをおぶら下げてやる、あまり品のいい言葉じゃないかもしれませんが、しかし、すごくよく分かる。「インセンティブ」のある意味を非常によくとらえていると思うのです。公的なところだと、なかなか使いにくいかもしれませんが、直感的に分からせる非常にいい言葉だと今でも思っています。しかし最終発表には残せませんでした。要するに「白書や広報紙がこういう言葉で埋め尽くされるのはよろしくない」、そういう意見も出ました。それからいっぱい言い換え語が出ると、また混乱するということがあって、最終的には載らなかった。「馬ニンジン」はほとんど和語に近い、漢語でしょうが、和語に近い感覚で使っているものですから、日常的な言葉も検討課題にはなりましたという事例として申し上げたいと思います。

山田 ボトルネックという語が話題のときに専門家の先生から「専門分野では^{びんくび}瓶首効果という言葉を実際に使っている場面もあるんだよ。」という話があったようでしたが。漢語が外来語であった時代もあったわけです。次に陣内先生への御質問を御紹介します。「催し物、イベント、お祭りごと、フェアなどというふうに言い換える、マスコミなどでもわざわざ外来語を使う背景はどこにあるのか」。そして先ほどのペDESTリアンですが、「そういう体質というのは、どこから来るのでしょうか」という御質問です。

陣内 お話の中でもありましたが、「何とかフェアとかイベント」は、その出来事の顔になるわけです。だから、そういう意味で目立たないといけないというのが一つあるわけです。「何とか催し物」とやると非常に一般的なものになってしまっていて、目を引かないことが非常に大きいだろうと思います。それだけ外来語の見栄えといいますか、外見と聞いた感じ、つまり、催し物とか開催というより、イベントという音の連続の「耳立ち感」でしょうか、そういうものがあると思います。外来語は、大正以降かなり増加してきた

わけですが、結局、今までになかった日本語の連続音です。聞いた感じが、むしろ漢語より耳立ちます。「バリア」を「壁」や「障壁」と比較しますと、障壁は拗音が入り、ちょっと聞いた感じでは分かりにくい。バリアと外来語になりますと、非常に明瞭に聞こえてきます。そういうものが顔として、ものあるいは何か概念の顔として働くわけで、そこでは外来語と言われるものが効果を発揮する。そこら辺に「体質」のからくりがあるのではないかと思います。

山田 それから御質問でよくあるのは、例えば「外来語に限らず、言葉の意味の、定義は何ですか」と聞かれる方が多いのです。外来語の問題もそうでしょうが、言葉には、辞書でいう言い換えのような提示、言い換えが一つあってそれで全部言い尽くせると考えがちです。定義は何ですか、それに合うか合わないか、だめかいいか、と考える方が多いようですが、他に似たような言葉があるが、言い表せる言葉がないからそれを使う、ということであると思います。陣内先生には、「もう、外来語を使ってしまったほうが、よく理解できるんじゃないか。例えばパソコンやコンピュータなどのようなもので、外来語のままのほうが、もうこれ以上混乱させないのではないかという、そういう語のグループや面があって、その中で一部分だけを言い換えても意味があるんでしょうか。混乱はないんでしょうか。」という質問があります。

陣内 どういう分野を言い換え対象にしているか、ということとも関連してくるものだと思います。話の中で、どういうふうに絞り込むか、ということをお話したわけですが、私個人の意見としては、コンピュータ関係はもう言い換えは無理じゃないかと思っています。それは実際に動かしてみないと分からないことだし、漢語に言い換えても同じようにちょっと難しいでしょう。我々の英語、日本人全体としての英語力、誰かと話すという意味じゃなく、英語を見て分かるとか、あるいはどういう英語環境にいるか、そういうことを考えますと、そこまで言い換えていくのは、かえって混乱を招くのではないかという気がしています。基本は抽象的な概念じゃなく、具体的な物に関しては外来語のままいくのは、それほど抵抗がないのではないかと。そういう考え方が根本にあります。

山田 佐竹先生には、質問回収がお話の前になりましたので、順序が逆で、御質問があまりなかったのですが、「ナイトゲームをナイター、ダンプトラックをダンプカー、アパートメントをアパート、パーソナルコンピュータをパソコンのように、日本独自のカタカナ語として存在してしまうことの原因背景、考え方などを教えてください」という御質問です。

佐竹 難しいですね。でも言葉、外来語に限らず、私たちは言葉を短くするのは、しょっちゅうやっています。特に関西では短くするのが好きです。例えば地名などは特に多くて、この近所では、西宮北口を西北と略したり、上本町六丁目を上六とか、そういう長ったらしいものを短くする、その原理は働いているだろうと思います。ただ外来語は、基本的に、平均的に言いますと長いのです。拍数音節が多いものが多いので、短くした

くなって、よく使う言葉ほど短くなる、そういう原則といいますか傾向があるわけです。外来語も親しむというか、定着していけばしていくほど短くなるという傾向がある。パーソナルコンピュータでは長いですから、パソコンというように短い。ノーマライゼーションはノーマイにはならないだろうと思いますが、もっとみんなが使うようなことは短くなる、そういう働きがあつて、こういう現象が見られると考えています。

山田 そろそろ時間になってきましたが、大きな問題あるいは将来の問題が二つあります。一緒に考えていただきたいので申し上げますと、一つは先ほど、英語教育と日本語の中での外来語としての言い方とか、そういうものとぶつかるとか、あるいは英語を勉強するうえで外来語の言い方や書き方が邪魔になるとか、そういうことがある、というのがありました。「今の公共性のある外来語はほとんど英語からだと思いますけれども、将来どうなるか。あるいは、英語教育と外来語の普及ということ、あるいは外来語を使うこと、使用についてどういうふうにか考えるか」という問題です。もう一つは、すごく大きなテーマで、「外来語はこのまま増え続けて、どうなっていくんだらう。あるいは専門分野に外来語が増えていって、ますます分かりにくくなっていくんだらうか」という問題です。これはそれぞれの先生方に伺いたいと思います。いかがでしょうか。

相澤 一応順番なのでトップバッターで。これは私の個人的な考え方ですが、英語と日本語は、別のものでして区別したほうが良いと考えます。外来語の問題は、基本的に日本語の中に外来語の要素が根づくかどうかという当たり前の話なので、日本語として必要なものはとる、いらぬものは入れないという考え方です。それと英語はまた別の世界だと思っています。英語は英語として、きちんと勉強すればいいだろうと思います。その中間のよく分からない世界がどうしても生まれると思いますが、芸術の世界だったらいいと思いますが、日常ではそれは困るのではないかと考えます。すべてのお答えになっていませんが。

陣内 一つ目は、英語教育と外来語ということの質問だったと思いますが、一般に英語の先生は、多分、外来語に対しては否定的だろうと思います。発音もおかしくなるし、意味もちょっとずれたものを堂々と使ってしまふことで、英語を習得するうえでは障害になる。それはローマ字教育にさかのぼると思います。「日本語をローマ字で表記すると、英語を見たときにも何かそのような発音をしてしまう」と言われる先生もいるのです。どこに英語の目標を置くかということを考えると、英語の先生が学校で教えるようなレベルでは、私は、外来語はあまり障害にならないのじゃないかという考えを持っています。というのは、一つは日本風英語でいいじゃないかということです。発音は非常に下手だけど、要するに通じりゃいいじゃないか、という考えです。日本語と英語は違うし、外来語はちょうど中間物みたいなものなのですが、その外来語をどう使うかは、その人の知恵であると思います。私は外来語風英語でも使えれば、通じれば、それでいいのじゃないか。非常に多様な価値観を認める今の世界で一つの英語というのはあり得ま

せんので、それでいいのじゃないかと思えます。それから外来語は今後どれくらい増加するだろうか。そういう見通しを聞いておられると思えますが、これは全く分かりません。私の直感ですが、ずっと先の将来ですが、漢語と同等ぐらいになるのじゃないかという気はします。私の発表の冒頭で、列島日本丸の航行状態についてお話したのですが、このままいけば、そのような感じがします。

佐竹 まず一つ目の外来語と英語教育ですが、私も今のお二人とほとんど同じで、外来語と英語を切り離す考え方を持っています。私は外来語を特別扱いたくないという趣旨で、外来語は日本語であると考えています。多分、外国語と結び付けるから問題が起こる。結び付けなくなる気持ちは分かりますが、それを結び付けずに、日本語として扱うという努力をすべきだろうと私は考えています。それから二つ目、将来、これは私も分かりません。だけど将来どうなるかを心配するより、今、自分はどう使うのかということを考えていると思っています。外来語を使うことが、今、自分が表現するにあたって、それが非常に効果を持っている良い言葉なのかどうか、あるいは人が使っているのか、その言葉は分かりやすいのか、分かりにくいのかということもいつもチェックしながら、外来語の問題を考えていってくださるほうが、将来の外来語を心配していただくより、もっと生産的であると考えています。

山田 どうもありがとうございました。質問で私が受けたものでは、野球絡みですが、「大リーグという言葉があるのに、メジャーリーグと言って、メジャーリーグと言わない。巻き尺とは違うのに。」とか(笑)、「ある日、突然プレイオフと言われても分からん」とか、そういう身近な外来語の問題がたくさん私どもにも寄せられております。「外来語言い換え提案」で出てくる外来語は、広報紙や白書から得られたものですので、あまり馴染みがなかったり、使う必要がある人のためのものだろう、というところがありますが、今日のようなことをきっかけにお考えになったり、お話しになったりする機会、あるいは佐竹先生のお話を実現するようなことがあればと思っています。

山田 今日は、いろいろな立場で、いろいろなことを御紹介しました。この後、言語文化研究所の所長として佐竹先生にお開きの言葉をいただきます。

佐竹 今日は本当にありがとうございました。正直に申しまして、何人の方にお見えいただくか非常に心配しており、共催と偉そうなことを言っておきながら、三人ぐらいだったらどうしようと心配していました(笑)。今日も、今までも申し上げたことばかりですが、山田さんがおっしゃったのはそのとおりで、この会が皆様にとって今日で終わるのではなく、これからも外来語だけではなく、日本語をずっと考えていただくきっかけになればと思います。そういう人が一人でも二人でも増えていくことが私たちの願いです。今日集まってくださいました皆様に厚くお礼を申し上げ、私の挨拶といたします。どうもありがとうございました。(拍手) <終了>